二〇二一年三月二七日

炙られて鰭ちりちりと干鰈　素秀

燕来る里の駅舎に丸ポスト　小袖

蹴り損ねボール転転うららけし　せいじ

墓の場所問ひて小さき春日傘　素秀

春宵の白き巨船に旅ごころ　凡士

田楽の串に重たき堅豆腐　素秀

初花や夫と子の墓訪ふ道に　はく子

木蓮の落花掃かるる朝の路地　むべ

芽柳に触れつつ進む高瀬舟　愛正

夕まぐれ瀬戸は菜の花明りかな　凡士

小舟ちらばりて山湖のうららけし　よし子

軽トラに上着を放り春田打つ　凡士

ゆくりなく初花にあふ車椅子　わかば

東北を悼めと潤む春の星　むべ

潮騒の間遠となりぬ笹鰈　凡士

青空へ箍をゆるめし牡丹の芽　よう子

故郷の水の匂ひの蕨餅　素秀

毎週句会秀句・みのる選・二〇二一年三月二八日